図書館だより

第13号

1986. 1. 15発行

編集兼発行　三重短期大学附属図書館　514-01　三重県津市一身田中野字蔵付157　℡ 0592 32-2342

目　　次

生命科学（ライフサイエンス）についての最近の読書から……亀　谷　喜　夫　(1)
映画をめぐる女たち―第一回東京国際映画際女性映画週間―…内　村　瑠美子　(3)
新規受入図書案内 …… (7)
ベスト・セラーズ …… (12)

生命科学（ライフサイエンス）についての最近の読書から

亀谷喜夫

生化学を教えているものにとって、最近この方面の進歩発展は実に目まぐるしいものがある。と同時にかつては想像もつかなかったような発見が紹介されて、われわれは実に大へんな時代に入ってきていることを痛感する。ライフサイエンスに関するさまざまな目を見張るばかりのおどろきの中でも、とくに注目すべき事柄のひとつは遺伝子の本体究明とその働きに対する人工的操作の可能性についてである。生物の生命現象の基底に存在するものの実体が既知の化学構造を有する分子のつながりからなることが分って以来、その高分子としての立体構造の全貌を明らかにすることは今世紀最大の課題であった。「分子生物学の夜明け」（上・下）H. F. Judson 著（東京化学同人）（1979）にはこの遺伝子の本体であるＤＮＡの機能と構造についてＸ線結晶学、細胞学、遺伝学、生物化学など各分野からの研究成果がひとつに織り合わさって、ついにその実体が解明され、さらにそれらの業績を核として発展し、「分子生物学」なる新らしい学問分野が誕生していく過程をジャーナリストの眼で克明に追い、彼ジャドソンが７年余りの歳月をかけ、１００余名の科学者たちとインタビューを重ね、原論文はじめ膨大な記録、資料を収集して完成した壮大なドラマであり、科学ドキュメンタリーである。そしてタイム誌の評にも「天啓を得て高揚し、あるいは自己の見透しの誤ちに気づいて打ちのめされる科学者たちの人間像が生き生きと描かれている」とあるように読者にさながら推理小説を読むようなおもしろさを与えている。ただ、登場するたくさんの人物の名を覚えるわずらわしさと、科学的な特殊用語の理解に、この分野に多少の知識を有しない人にはやや難解な点もあるかと思われるが、しかしトルストイやルソーの長編小説を読破する根気と興味さえあれば

それも克服できるのではなかろうか。この本を読んで私がとくに感銘をうけたのは、ＤＮＡというような生化学的対象の研究に、それらの専門分野以外の人たちの直接的、間接的参加があり、その結果が実にうまく補い合って研究を有利に発見へと導いたということである。この本に登場する科学者の中には、まず主役であり、「ＤＮＡの２重構造らせん構造」発見の栄をになってノーベル賞を得たジェームス・ワトソンはアメリカの生物学者であり、同じくフランシス・クリックは戦後生物学に転じたイギリスの物理学者である。またこの発見に貢献した人の中には結晶学で有名なロザリンド・フランクリンやマックスペルツ、ローレンス・フラッグ、ライナス・ポーリングなどのノーベル賞級の化学者や物理学者、遺伝学で有名なサルバドール・ルリア、物理学から生物学に転じ、分子遺伝学を創設したマックス・デルブリュック、情報を提供した数学者などいろいろな分野の人たちが関係していることである。

そしてさらに重要な事は、彼等を迎えて互いに情報を交換し、刺激し合う場を提供した研究機関がアメリカ・イギリスをはじめ欧米各地に存在しているということである。この場合アメリカのコールド・スプリングハーバー研究所、イギリスのキャベンディッシュ研究所、フランスのパスツール研究所などがそれである。ワトソンもキャベンディッシュ研究所で結晶学を学び、クリックを知ったのである。この事は今後自然科学上の大きな発見においては単にひとつの限られた分野の人たちだけでは達成され得ないことを示しており、同時に今後の科学の潮流が大きく生命科学と物理科学のさらに前者が後者を包含して大きくまとめられていくとする未来科学への予測と一致するものでもある。そして、いまひとつ感じたことは、この本の中で著者も「１ダースほどの人が発見の可能なところにいた。６～７人は主役で、あとは基礎的事実を供給したか、近くで見ていたにすぎなかった」「互いに刺激し合い夢中で競走するという雰囲気の中で発見が生まれたが、勝ったのは思い付きと洞察と運であった」と述べているように、科学史上、発見が多分に偶然にもとづく場合は実に多いのであるが、この場合も例外ではなく、発見の最後の場面では実に１人の科学者のある一瞬のひらめいたある思いつきがヒントになっていたということである。だからこそ何か新しい発見をしようとすれば、科学者は常に自然現象について注意深くあらねばならないとはよく言われることである。

ちょうどこの本とよく似てわが国でも第一線のジャーナリストが現在活躍中の科学者を訪ねて生命科学に関する先端的研究の情報を取材した読みもので、ほとんど前の本と時を同じくして読んだものに「生命探検」田原総一朗（文芸春秋社）（１９８４）がある。前のものほどの大作ではないが、内容はまことに興味深く、生命現象のうちでもとくにいまひとつの最先端研究分野である「脳と老化」についてわが国の研究の現状が、これもドキュメンタリー風に書かれている。人類最後の研究課題として今世紀のあらゆる科学者が注目している脳。そしてバイオテクノロジー、メカトロニクスなどあらゆる最近の先端技術と密接に結びつき、コンピューターやロボット技術の発達が脳の構造機能の解明による成果であることは誰もが認めるところであろう。そしてそれらの研究成果はさらにいまひとつの人類の難問である「老化」についてもその原因解決の糸口をそれに求めようとしているのである。たとえば正常な細胞は予めセットされている寿命のプログラムによってか、修復機能の低下など何らかのエラーによってか、やがては老化して死んでしまうのである。ところがいったんガン化した細胞は際限なく分裂し続けて老化しない。だからガン化の仕組みの解明は老化の抑制につながるのではなかろうか。ガンの研究はこのようにして今では老化の問題とむすびつき、現に最近のガン研究者たちの多くはすでに次の課題である老化に対してターゲットを向けだしたといわれている。また最近ボケ老人の多発が多くの社会問題化してきているが、もしかするとあるウィルスが脳細胞中の遺

伝子に組み込まれて細胞の免疫力を低下したときにボケが起るのではなかろうかというヒントを提出している学者もいるというが、ガン化と関連して大へん興味深い。と同時にここでもまた遺伝子つまりＤＮＡがその奥底に姿をチラつかせているのである。そしてまたここでも脳と取組んで研究しているのが生化学者や生物学者、化学者ばかりでなく、物理学者や数学者たちさえもが大きな興味を抱いて研究に参加しているのである。またこの本の中には著者のインタビューに応じた学者たちの説明の中でいろいろと面白いエピソードが紹介されており、中でも「論理的にノウと答える場合は左から先に首を振るが、感覚的に答える時は右から先に振るはずだ」とか、「女性の流し目は右目が、男性は左目の方が効果的であるから、女性は男性の左側に座るとムードがよく、逆だと視線が冷たくなる」とか、「欧米人は虫や鳥の鳴く音を右脳で捉え、雑音としてしか聞かない（右脳は論理的機能を司るから）が、日本人は左脳で聞く（左脳は情感的機能を司る）からそれらの音にも意味を感じ、もののあわれを感得できるのである」などは、かの夏目漱石に師事した科学者寺田寅彦の随筆を久しぶりに読むおもいがした。著者の言う、「脳戦争（ブレイン・ウォーズ）」の最前線では今やあらゆる分野の人たちによってその謎を解明しようと殺到しており、いろいろな新事実が明らかにされつつある。そしてその結果、「右脳を鍛えよ」とか、脳の働きをよくするにはリトルブレインである消化器を鍛えよ」とか「シナプスの繋ぎ換えを促進して脳を若返らせることができる」などの新理論が生まれ、さらに副作用なく眠る薬や、やる気を起させる薬、記憶をよくする薬、などの発見が次々と発表されてきているのである。さらに人類最古の夢であった不老不死についても今や科学のメスが入れられようとしているのである。それら謎のすべてが解明しつくされた時人類は一体自分自身に対してどんな感慨を抱くことだろうか。そしてそのときこの世は一体どんな状態になるのだろう。そういえばこの本の終末にもちょっと気になることを言っている学者の言葉があった。「脳のハードウエアのメカニズムを詰めていくと、逆にソフトウエアとの距離がだんだんひらいてしまう。心や精神がどんどん遠くに逃げていってしまうように思う」と。繰返して言うが今やわれわれは大へんな時代に足を踏み入れようとしているといえるのではなかろうか。ここに紹介した２種類の本はそうした意味でいろいろと考えさせられることを多く含んでおり、ぜひ一読をすすめるものである。

映画をめぐる女たち

― 第一回東京国際映画祭 国際女性映画週間 ―

内村 瑠美子

第一回東京国際映画祭が５月３１日から６月９日まで開催された。もちろん日本で初めての国際映画祭である。

この映画祭は、映画関係者とジャーナリストを主な対象としている他の多くの国際映画祭とちがって、一般公開の形をとったことが特徴である。1,２００円出せば誰でも見られる、ということは映画ファンにとってはなにより嬉しいことであった。１０日間に計１３７本が上映された。これほどたくさんのご馳走を目の前にすると、ただ気があせるばかりということにもなるが、私は国際女性映画週間と銘打たれたさまざまな国の女性監督による８本のうちの７本と、昨年カンヌ映画祭でグランプリを獲得したヴィム・ベンダースの「パリ，テキサス」をみた。ここでは女性監督による作品についての若干の紹介と感想を述べてみようと思う。

上映作品は以下の８本である。

「AKIKO ーあるダンサーの肖像」（日本　１９８５．羽田澄子）

「エミリーの未来」（独・仏　１９８４．ヘルマ・サンダースニブラームス）

「思春期」（フランス　１９７９．ジャンヌ・モロー）

「ごめんなさい　アリョーシャ」ソ連　１９８４．イスクラ・バービッチ）

「ハンナ・Ｋ」（フランス　１９８３．コスタ・ガブラス）

「夕照街」（中国　１９８３．王　好為）

「ガイジン」（ブラジル　１９７９．山崎ちづか）

「マルチニックの少年」（仏領マルチニック　１９８３．ユーザン・パルシー）

上映前に監督が舞台で挨拶、日本の女性映画評論家を介して、観客との質疑応答に３０分があてられた。（ガブラス，パルシーは欠席）

日本代表の「AKIKO」だけはみることができなかった。また「ハンナ．Ｋ」のコスタ・ガブラスは言うまでもなく男性である。「Ｚ」や「戒厳令」など実際の政治的事件を扱った映画で知られるいかにも男っぽいガブラスが、女性の中にひとりまぎれているのはいかにも奇異に映ったが、製作がガブラス夫人であるということと、色も恋も関係ない政治映画ばかりを撮ってきたガブラスがはじめて女性を描いたからである、とは主催者側の説明である。「ハンナ・Ｋ」はひとりの女を愛する三人の男の恋の鞘当物語であるが、イスラエルが舞台となっており、人種問題がからまってくればこれもやはり一種の政治映画とみることはできる。しかし、女など眼中になかったような極めつきの硬派が、とにかく女性を中心に据えた映画を撮ったのだから、考えようによってはこれもひとつの“女性映画”ではあるかもしれない。

六人の女性監督の作品に、女性であるが故の共通点があったのか、と問われれば、あったとも、なかったとも答えるしかない。女は男でなく、男は女ではない。だがまた共に人間としてひとつの同じ世界を目の前にしているのである。だから彼女たちの作品にはおのずから自己の性が何らかの形で反映してもいるし、また人間としての各自の姿勢が貫かれていることも当然だといえる。むろん、たとえばブラームスのように、もっぱら女性の問題を意識的に追求し続けているかに見える監督はいる。「かに見える」と言うのは、彼女の作品はまだ二作しか公開されていないから、断定はできない、ということである。第一作「ドイツ、青ざめた母」は、日本では二年前に目立たない形で公開されたが、じわじわと特に女性のあいだで評価が高まり、これを“見る会”などが組織されたりした。オリジナルの脚本を自分で書く、というところにも彼女の一貫した姿勢をうかがうことができる。「エミリーの未来」は母親と娘の葛藤を描いている。未婚のまま子どもを生み、その子どもを両親にあづけて女優業を続ける娘に、母親は女としての嫉妬を隠さない。母親は結婚のために歌手への道を断念した女である。「才能はあんたより私の方があった」と口惜しがるが、娘を非難する表向きの理由は、彼女が結婚もせず子どもを生み、その子どもを自分たちに押しつけて、男から男へと自由奔放に生きている、そのフシダラさがゆるせない、というものである。娘の側に立つならば、彼女は決してフシダラに生きているわけではないのだが、ともあれ、子ども・愛・仕事、これは今日の女にとって、大きな問題であることは言うまでもないだろう。そしてこうした女性にかかわる問題は、多くは女対男、あるいは女対社会の図式で語られる場合が多い。しかしブラームスは、母と娘という同性間の葛藤のなかに、女の問題の根の深さを探ろうとしている。女の足をひっぱるのは女である、とはよく言われることである。しかし、この母娘のように、どんなに反発し合おうと、女の痛みを理解できるのも、まずは女であろう。

私は私を愛さなかったから、あんたを愛する
私は私を愛したから、あんたを愛する

と、酔った母が娘に歌って聴かせる場面のこわさと哀しみは、女でなければわからないものかもしれない。

女優役の娘を演じたのは、「禁じられた遊び」の女の子を演じたブリジット・フォッセーで、監督と一緒に舞台に現われた彼女は、あの時の

女の子とまったく同じつぶらな瞳で、女であること女優であることをひたむきに、時に“過激”に語ったのが印象的であった。

通路にまであふれる観客を集めて盛況だったのが、ジャンヌ・モロー監督の「思春期」である。ジャンヌ・モローといっても今の若い人は知らないようだが、私の学生時代はフランスの大スターであった。グリーンのジャケットに赤い靴で舞台に現われたジャンヌ・モローはさすがに肌の衰えは隠せない年齢であるが、気さくな人柄と活発な精神を感じさせて観客に感動を与えた。「思春期」は彼女の監督二作目で、私個人としては、今回みた7本のうちでもっとも好きな作品である。満月が曇を払うように滑ってきてぴたっととまるタイトルバックのリズムからして並でない映画的感性を信じさせるに足るものだった。12才のパリの少女が両親と一緒に田舎の祖母の所で一夏を過ごす話である。思春期にある女の子の心と体の揺れを中心に、村人たちの生活が描かれていく。祖母に惚れているアル中の老人、従容たる態度で死を待つ盲目の老人、知恵遅れの青年、私生児を生んだ娘、生ませた青年、少女が魔女と信じている女、若いユダヤ人の医者などが疎外も排除も知らずに暮らしている。人生の達人として少女をやさしく包みこむ祖母（シモーヌ・シニョレが実に良かった）。医者をめぐって少女がライバル視する母親。たとえばここにも女の一生の縮図を垣間みることもできなくはないが、そういう限られた見方を貧しいと思わせるほどの、なつかしい人の世の世界がここにはあった。かつてあったかもしれない疎外も排除も知らない共存の世界に対するなつかしさである。みずみずしく美しい作品であった。

「ごめんなさい　アリョーシャ」のバービッチ監督は、ソ連に女性監督はどれくらいいるのかという質問に対して、ソ連にはいくつかの監督集団があって、彼女の属する第三グループには8人の男性4人の女性（うち二人は死亡して欠員のまま）がいるといい、監督への道に男女の差はまったくないということ、だからこのような女性監督週間のような女性だけのプログラムが組まれたことに驚いてさえいる、と語っていた。中国の王好為監督も、映画監督という仕事はハードであるから女性向きの職業とはいえないにしても、監督への道に男女の差別はないことを語っていた。

さて、ソ連でも、特に若い女性が未婚のまま子どもを生むケースが非常に増えているらしい。生まれた子どもを育てる施設は整っていても、子どもには母親が絶対に必要なのだ。赤ン坊は母親の乳房から乳だけでなく愛情をも飲むものだからである。そのことを「ごめんなさい　アリョーシャ」で訴えたかったと、この質朴な感じのロシアの母さん風監督は誠実に語った。若い貧しい娘に子どもを生ませて知らん顔の青年一家の“ブルジョワ”的生活を享受している様がいかにもステレオタイプであるところに、社会主義国の一側面を垣間みたように感じたのは、私の偏見だろうか。

「夕照街」は、現在の中国の一断面をありのまま描いたものだ、と監督自らが語ったように、中国映画といえばカンフー映画しか知らなかった私であるから、映画的関心よりものぞき趣味の方が先行してしまった観がある。夕照街は、北京の古い横丁の名前である。これは架空のものではあるが、このような古い横丁――中国版向こう三軒両隣り風の長屋――は実際まだあちこちにあるという。一方カメラは、ぞくぞくと建てられていく近代的高層アパートを映しだす。夕照街にはいろんな人たちが暮らしている。住居が狭くてひとつの机を交替で使う高校教師夫妻。娘を香港の金持と結婚させようとやっきになっている父親。向かいのトラック運転手に惚れている女医。失業中の青年。映画をみると失業中の青年（待業青年）も多いらしく、派手なTシャツを着てバー（？）でビールの大ジョッキをあおってふてくされたりしている。こんな場面を物珍しげに眺めるのは、とりもなおさず私が中国の素顔を知らないということである。そして、横丁に永く暮らしここの生活を愛してきた老人。彼は北京の伝統の味を復活させるべ

く、店を出すことを考える。失業中の青年たちも活気づく。“個人的”な店を張るなんて“資本主義”だと非難されるだろうか。老人はそんな不安も抱いたが、店は無事開店できた。しかしこの横丁もついに取り壊され、近代的なビルに生まれかわることになる。

日本の女性評論家が、「こういう街が消えていくのは淋しい気がしますが」と水を向けると、王監督は、「でも、近代的な生活の方が望ましいですから」と一言だけ答えた。ガレキの山と化した夕照街にひとりたたずむ老人の感慨も真実なら、王監督の言葉も現在の中国の本音なのだろう。中国はどこへ行く。何によらず外野席を好む私には、映画的快楽とはまた別の次限で面白い映画の一本であった。

「ガイジン」は、ブラジルの日系三世の女性の作品である。明治４１年、１６歳で兄とともにブラジルに出稼ぎのつもりで渡った監督の祖母の話である。祖母は健在で、この映画を見終ったとき、ははなはだ機嫌が悪かったという。「私のした苦労はこんなものではなかった」と文句を言ったそうである。舞台には監督と一緒に主演女優の塚本恭子が立ったが、彼女が面白い話を披露した。監督は日本語が解らない、女優はブラジルの言葉が解らない。それでも二人はよく言い争いをした。セリフに関するものである。塚本が、日本の女はそれも明治の女は、こんなにズバズバ自己主張などしない、と言えば、監督は、でも私はこのセリフをどうしても言わせたい、と応じる。結果、映画の中のヒロインは、言葉少なくやさしく、逆境をのりこえるたくましさを備えた明治の女という旧来のイメージの枠内に収まっている。ブラジルは、さまざまな民族の寄り合い所帯である。誰しもが他に対してガイジンなのである。このことを伝えたかった、と彼女は言う。万世一系ではいかにも古すぎようが、しかし日本にあるかぎり、ひとつのファミリーのように生きている日本人である。そのような日本人のひとりとして、この監督のようなガイジンとしての日本人に接する機会を得たのは一種の刺戟ではあった。

「マルチニックの少年」はパリでヒットした作品である、という。今秋日本での公開も決まっている。今２７歳という若い女性の第一作で、しかも彼女はマルチニック島初の映画監督である。原作の西インド諸島の作家ゾベルの自伝的小説を１４歳の時に読んで感動、いつかこれを映画に撮りたいと思い続けていたというから驚く。パリへ出てから、シナリオすら誰にも読んでもらえない数年が過ぎたある日、ひとりの映画人が読んでくれた。そして励ましてくれた。それがトリュフォーだったという。

たまたま東京の友人のやっているバーで、やはりこの映画祭に作品をもって来日中のフランス人の詩人・映像作家マーキーという女性と知り合ったが、彼女も今日映画を撮ることのいかに困難であるかを語った。そして「人生において女はいつも待たねばならない、そうではないか」ともつけ加えた。

物語は、マルチニック島のサトウキビ畑のひろがる黒人街に、祖母と二人で暮らす貧しい少年が、成績が優秀で奨学金を得て町の学校へ進む、それを見届けるようにして祖母は死ぬ、というものである。貧しいが毅然と生きる祖母、自然のもつ魔力を教える元アフリカ奴隷の老人、くったくのない子どもたち、映画としてはよくできていると思った。だが、これを見たフランス人の中には、これは所詮、エリート出世物語ではないかと批評する向きもあった。かたや植民地出身の人間が精いっぱいアイデンティティーを主張して故郷への愛を映像に託そうとするかと思えば、かたや、植民地の、それも一般大衆をどうしてくれるのだ、と言わんばかりの批評をする本国の観客がいる。

たしかに、たかが映画であるが、人びとは映画を通じていろんなことを考え、さまざまのことを知ることもある。「たかが映画じゃないか」とは、映画の巨匠ヒチコックの名言として知られている。このでんでいけば、たかが小説、たかが文学じゃないか、と言うこともできるだろう。しかし人間のする経験として、映画をみる体験や小説を読む体験が、現実の中でする体験

より劣るものであるとは、断じていえない。今回の映画祭もたかがお祭りであったが、女性の手になる映画を、たて続けにみるという初めての体験は、なかなか感動的な体験であった。

新規受入図書案内

総　　記（０００）

選定図書総目録　'８４　'８５　日本図書館協会
朝日新聞縮刷版１９８４，４〜１９８５，９
日本書籍総目録　書名編　索引編
日本書籍出版協会編
人名よみかた辞典　姓の部
日外アソシエーツ
日本書誌の書誌　人物編Ⅰ　主題編Ⅰ，Ⅱ
総載編　天野　敬太郎
国立国会図書館所蔵児童図書目録１９８１
国立国会図書館
２０世紀思想家文庫　14　16　村上　陽一郎
世界大百科年鑑　'84　'85　下村　邦彦　編
日本書誌学用語辞典　川瀬　一馬
書誌年鑑　'８４　'８５　朝倉　治彦
図書・図書館用語集成　渡辺　正亥
新版　レファレンス・ブックス　長沢　雅男
図書館年鑑'８２　'８３　'８４　'８５　日本図書館協会
日本の図書館　'84　日本図書館協会
バーリン選書　1. 2. 3.　福田　歓一
Kodansha Encyclopedia of Japan 1〜9
講談社
新　中国年鑑　'８３　'８４　中国研究所編
日本雑誌総目次要覧　天野　敬太郎　他
国立国会図書館所蔵和雑誌目録　'８４
国立国会図書館
出版年鑑　'８５　出版年鑑編集部
Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse 7〜10
ソートン・紙券信用論　渡辺　佐平　他
中国年鑑　'８５　中国研究所
１９８５総合文庫目録　総合文庫目録刊行会
中高年のためのコンピュータ読本　Ⅰ　Ⅱ
中高年情報処理教育研究所
三代つれづれ草　植谷　等
日本の古典名著総解説　赤塚　忠
市民の図書館　日本図書協会
図書館員選書　3　前川　恒雄　他
資料分類法実習　菅原　春雄
図書館サービスの測定と評価　森　耕一
最近の参考図書　１９８１〜１９８２
日本の参考図書編集委員会
Year's Books　１９８３　１９８４
日本図書館協会
公共図書館システム最低基準　稲川　薫
図書館学の五法則　Ｓ．Ｒ．ランガナタン
図書館で何をすべきか　前川　恒雄
まちの図書館　図書館問題研究会
レファレンスサービスの発達
サミエル．ロースステイーン
図書館運営五十年　浪江　虔
人間にとってのコンピューター　戸田　正直
知識化社会への構図　増田　裕司
情報ネットワーク化と産業組織
今井　賢一チーム
高度情報社会のパラダイム　香山　健一チーム
最新ニューメディア事情　芦田　良貫
企業情報ネットワーク　花岡　菖
著作権事典　著作権資料協会
世界名著大事典　１〜８　平凡社
雑誌記事索引　国立国会図書館
日本全国書誌（書名　著者名）索引　'83
国立国会図書館

〈岩波新書　黄〉
四谷怪談　広末　保
ああダンプ街道　佐久間　充
核廃絶は可能か　飯島　宗一　他
俳風動物記　宮地　伝三郎
インパール作戦従軍記　丸山　静雄
子どもの思考力　滝沢　武久
ごみと都市生活　吉村　功
イワナのなぞを追う　石城　謙吉
戦後教育を考へる　稲垣　忠彦
術語集　田村　雄二郎
橋と日本人　上田　篤
人間喜劇と老嬢たち　寺田　透
中東情勢を見る眼　瀬木　耿太郎
データ戦後政治史　石川　真澄
グスタフ・マーラー　柴田　南雄
フルトヴェングラー　脇　圭平
地方自治法　兼子　仁
知力と学力　波多野　誼余夫
情報ネットワーク社会　今井　賢一
ドフトエフスキー　今川　卓
内村　鑑三　鈴木　範久
読書と社会科学　内田　義彦
ことばと発達　岡木　夏木
人間生活とエネルギー　押田　勇雄

現代ヨーロッパの原語　田中　克彦
水俣病は終っていない　原田　正純
日本語の中の外国語　石綿　敏雄
アレルギーの話　矢田　純一
苦悶するアフリカ　篠田　豊
超能力の世界　宮城　音弥
抽象絵画への招待　大田　信
日中戦争　古屋　哲夫
わが体験的教育論　中野　孝次
コンスタンティノーブル千年　渡辺　金一
家族という関係　金城　清子
変動する日本列島　藤田　和夫
香　港　岡田　晃
ビバクシャインＵＳＡ　春名　幹男
経済データーの読み方　鈴木　正俊
職中用語集　三国　一郎
異邦人は君ケ代に乗って　金　賛汀
フットボールの社会史　Ｆ．Ｐ．マグーン
江戸名物評判記案内　中野　三敏
インド国民軍　丸山　静雄
核の冬　Ｍ．ロワン＝ロビンソン
女性画家列伝　若桑　みどり
高杉晋作と寄兵隊　田中　彰
昭和青春読書私史　安田　武

〈岩波ブックレット〉
雇用の平等と女と男　岩波書店編集部
死罪か無罪か　佐野　洋
トマホークとは？　世界編集部　編
三毛猫ホームズの青春ノート　末川　次郎
「世界」の４０年　大江　健三郎
単身赴任　平松　齊
核廃棄物　高榎　堯
いま教育に欠けているものは　谷　昌恒
ＳＤＩとは何か　豊田　利幸
しっかり母さんとぐうたら息子の人生論　沢村　貞子　他
教育基本法をどう読むか　堀尾　輝久
手づくりの教育　丸岡　秀子

哲学・宗教（１００）

ルソー全集　木崎　喜代治　他
意識の起源史　上　エーリッヒ・ノイマン
言葉と知的発達　ピエール・オレロン
ヘーゲル法哲学批判序論　カール・マルクス
子どもの「自己」の発達　柏木　恵子
認知心理学講座　１．２．　大山　正　他
講座　現代の心理学　２～８　細谷　純　他
大哲学者の根本問題〔現代　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ〕　Ｊ．シュペック
キエルケゴールと悪　Ｋ．ヤスパース　他
キエルケゴールの弁証法と実存　Ｇ．マランチュク
キエルケゴールのヘーゲルへの関係　ニエルス・トウルストルプ
人間の記憶　Ｇ．Ｒ．ロフタス
イリイチ・ライブラリー　４．10．　イバン・イリイチ
カント全集　第１巻～第１８巻　イマヌエル・カント
弁証法の冒険　Ｍ．メルロ＝ポンティ
自然哲学　上　下　ヘーゲル
ヘーゲル哲学の基本構造　中埜　肇
論理学・形而上学　ヘーゲル
講座　日本思想　１～５　相良　亨　他
日本人の深層分析　１．２．４．５．６．９．　馬場　謙一　他
ニーチェ全集（第Ⅱ期）１．７．　Ｗ．Nietzsche
高校生の主張　毎日新聞社
心理学　Ⅰ　Ⅱ　八木　晃
日本宗教事典　小野　泰博　他
人類の知識と自由　向井　久
人間の形成　ゴーデン．Ｗ．オルポート
日本人の心　相良　亨
感覚の分析　エルンスト・マッハ　他
表と裏　土居　健郎
ロック道徳哲学の形成　太田　可夫　他
倫理　愛の構造　井上　忠　他
ハイデッカーの実存思想　渡辺　二郎
西洋古代哲学　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　川田　熊太郎
心理学パッケージ　１～５　推名　健　他
知能は測れるか　Ｌ．ケイミン
ハイデッカー全集　９　ハルトムート・ブナー
哲学　５．７．10．14．　大森　荘蔵　他
心理学関係研究誌文献目録　日本教育情報学会
文学作品に学ぶ心の秘密　米山　正信
暮しに生きる佛教語（有斐閣新書）今成　之昭
聖書おもしろ辞典（有斐閣新書）　千代崎　秀雄
デイコンストラクション（岩波現代選書）　Ｊ．カラー

歴　史（２００）

世界各国便覧叢書　日本国際問題研究所
資料日本現代史　1～7　11．12．13．20．21．22．　藤原　彰　他
日本史小百科　18．19．　安田　元久　編
夢を食いつづけた男　植木　等
ニイルのおバカさん　A．S．ニイル
続・現代史資料Ⅰ　松尾　尊兊
麻山事件　中村　雪子
人物書誌大系　4～12　田熊　渭津子　他
西洋史辞典　新編　京大西洋史辞典編纂会
京都大辞典　淡交社
国史大辞典　第5巻　国史大辞典編集委員会
秘録戦後史　1～5　清国　重利
木戸幸一日記　木戸　幸一
秩父事件の妻たち　新井　政次郎
女たちの秩父事件　五十嵐　睦子
秩父事件史料　1～5　江袋　文男　他
ヨーロッパ１００年史　J．ジョル
イギリス史　1～3　G．M．トレヴェリアン
縄文文化の研究　1～10　加藤　晋平　他
日本大地図帳　下村　邦彦
ルイズ　父に貰いし名は　松下　竜一
戦死やあわれ　西川　勉
歴史の方法と民族　阪東　宏
分断民族の苦悩　李　泳禧
近代日本の生活研究　生活研究同人会
日本の遺跡発掘物語　1～10　森　浩一
世界地図　平凡社
14Ｃ年代測定法　遠藤　邦彦
元始　女性は太陽であった　1～4　平塚　らいてう
ソ連邦の歴史　Ⅰ，Ⅱ　H．カレール＝ダンコース
国史大辞典　6　国史大辞典編集委員会
近畿野外地理巡検　藤岡　謙三郎
都道府県名と国名の起源　吉崎　正松
外国人による日本地域研究の軌道　石田　寛
日本の都市システム　田辺　健一
ベトナム戦争の時代（有斐閣選書）　清水　和夫

社会科学（３００）

大友福夫先生還暦記念論文集　黒川　俊雄　他
「再軍備」の軌跡　読売新聞戦後史班
新しい道路交通法令　警察庁
原典対訳マルクス経済学レキシコン　13～15　法政大学大原社会問題研究所
労働者状態の理論的分析　小川　和憲
国際関係の政治経済学　溝口　孝
現代日本の支配構造　現代と変革編集委員会
教育学大全集　源　了圓　他
２１世紀への挑戦　東京繊維協会
柔構造の生活時間を　労働省労働基準局
女性のための生活の経済学　谷川　一男
国民生活指標　国民生活審議会
社会参加活動の実態と課題　経済企画庁
日本国勢図会　'85　矢野　一郎
世界の子どもの歴史　2～10　三浦　一郎　他
消費者破産の諸問題　井関　和雄
フーヴァー大統領の不況対策　尾上　一雄
自己啓発　後藤　敏夫
効果を上げる企業内教育　青木　武一
中高年活動化のための生涯的職務設計　長町　三生
日本の企業年金　６０年版　首根田　郁夫
法人税の基礎知識　三訂版　田代　茂
経済成長と所得分配　L．パシネッティ
均衡分析の数理　丸山　徹
日本経済の構造と行動　上、下　山崎　義一
対人心理学トピックス１００　斉藤　勇
犯罪白書　６０年版　法務省
財政統計　６０年版　大蔵省
西南中国の小数民族　鈴木　正崇
教育心理学の展開　肥田野　直
戦後法学文献総目録（1981～1983）　法律時報社
河上　肇全集　２６～２８　Ⅱ期版続１～６　河上　肇
Marx-Engels Gesamtausgabe 1－13　1－24　Marx, Engels
David Ricard Critical Assessments　1～4　John Cunningham Wood
やりとげる力を育てる（有斐閣新書）　宗　省三
注釈　民事訴訟法（有斐閣新書）　鈴木　正裕
地域福祉教室（有斐閣新書）　阿部　志郎
創造力を育てる（有斐閣新書）　住田　幸次郎
Marxism and the Question of the Asiatic Mode of Production　Marian Sawer
Employment Law　F. V. Prondzynski　C. McCarthy
ユネスコ版　人権と国際社会　上　下　カーレル・バザック

社会福祉法人の手引　全国社会福祉協議会
犯罪学　菊田　幸一
新　社会学辞典　D．ミッチェル
モンテスキュー研究　樋口　謹一
犯罪者処遇の思想　坂田　仁
犯罪者処遇の理論と実践　加藤　久雄
国際会計研究　新井　清光
現代日本の消費経済　出石　康子　他

自然科学（４００）

早わかり医学検査用語　鈴木　弘文　他
保健栄養学　片山　洋子　他
ヒトのからだ　ジョナサン・ミラー　他
過酸化脂質実験法　金田　尚志　他
食品の無機質含量表　Mccance Widdowson
嫌気性菌の分離と同定法
日本細菌学会教育委員会　編
総合多糖類科学　上　原田　篤　他
ビタミンCと健康　村田　晃
一般化学　上下　ライナス・ポーリング
生物の実験法　１～３　宇津木　和夫　他
動物行動学入門　A．マニング
生命の科学　２．８．　香川　靖雄　他
現代化学史　１．２．３．
アーロン・J・アイド
化学　その基礎へのアプローチ
R．J．Ouellette
分子生物学の夜明け　上　下
H．F．ジャドソン
公衆栄養活動の展開　細谷　憲政　他
統計学入門　森田　優三　他
生活のための栄養学　村田　希久
偶然と必然　J．モノー
環境衛生学概説　新版　庄司　光
食品衛生学概説　四訂　相磯　和嘉　他
心の世界から　石田　春夫
続　心の世界から　石田　春夫
メディカル・トピックス
医学のあゆみ編集委員会
人体生理の基礎　真島　英信
生化学辞典　宇井　信生　他
メディシナル　ケミストリー　山川　浩司
日本標準化石図譜　森下　晶
食品蛋白質　R．E．フィーニー
生化学実験講座　第１巻　日本生化学会
やさしい病態生理　秋山　房雄
免疫と栄養　坂本　元子
市町村の保健事業　多田羅　浩三
米・大豆と魚　藤巻　正生
臨床栄養学　岡部　和彦
加工食品と栄養　細谷　憲政
食の原点　越智　猛夫
生活のなかの有機化合物　大森　正司
日本食品成分表　四訂　医歯薬出版
回帰分析　佐藤　隆光
現代の統計　１～７　鈴木　義一　他
Pour découvrir le corps humain
R．Tavernier
Biologie　R．Tavernier
現代生物学大系　沼田　眞　監修
科学大辞典　国際科学振興財団
医療と人権　加藤　一郎　他
Nutrition and Lifestyles　M．R．Turner
Food Chains and Human Nutrition　Blaxter
入門栄養学　北岡　正三郎
女のからだ　秋山　洋子　他
ヒューマンサイエンス　１～５　小林　登　他
今日の治療薬　'85　水島　裕　他
食料　栄養　健康　食糧栄養調査会
有機化学講座　10　後藤　俊夫
環境科学辞典　荒木　俊　他
化学構造による医薬品の系統分類
藤井　喜一郎
コレステロールの医学　板倉　弘重
酸一塩基の理論　H．L．Finston
科学革命の歴史構造　上　下　佐々木　力
化学構造式は語る　泉　邦彦
原子の構造と化学結合　森野　米三　他
化学進化　江上　不二夫　他
思いちがいの食生活　鈴木　雅子
栄養性貧血　清水　猛行
野菜と果実のビタミンC入門　斉藤　進
Maga Nutrition　リチャード．カニン
核酸の塩基配列決定法　添田　栄一
電気泳法の診断への応用　中尾　真
ゲル電気泳動法　A．H．Gordon
The Merck Index　M．Windholz
総合地域の科学　山田　安彦
防災地形　水谷　武司
遊水地と治水計画　内田　和子
地形分類の手法と展開　大矢　雅彦
法と文化シリーズ　医の倫理　阿南　成一

工学及び家政学（５００）

立体的原型　菊地　喜伊子
婦人既製服パターンの理論と操作　小野　喜代司
食品の加工と貯蔵　三訂　桜井　芳人　他
新食品の加工と貯蔵　小原　哲二郎
Clothesmaking　Linda Faiola
家庭科大事典　稲垣　長典　監修
Management in Family Living 5th Ed.　P. Nickell
Consumer Economics & Personal Money Management　F. M. Albin
調理科学　調理科学研究会
注解　特許法　上，下　中山　信弘
文化ファッション講座　男子服　子供服　新立体裁断　婦人服　文化服装学院
最新きもの用語辞典　文化服装学院
家庭料理ガイドブック　滝口　操
絹の科学　皆川　基
世界を包むきものの愛　山中　典士
中国料理技術入門　陳　健民
食と料理学　武　恒子
パンの研究　越後　和義
食卓のバルザック　ロベール・クルティーヌ
楽しい電子レンヂクッキング　川上　のぶ
図解　被服構成　間壁　治子
環境と人体　１～３　中馬　一郎　他
アメリカン・パッチワークキルト事典　小林　恵
産業廃棄物処理ハンドブック　厚生省環境衛生局
生活学へのアプローチ　川添　登
パッチワークブック　野原　チャック
日本のごみ処理　地域交流センター
服装デザイン論　飯塚　弘子
被服構成学　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　文化女子大学被服構成学研究室
楽しい生活設計　水島　照子
生活設計と家計簿診断　坂本　武人
Choosing Evaluation Techniques　H. T. Spitze

産　業（６００）

青果保蔵汎論　緒方　邦安
日本の地下街　杉村　暢二
農業地理学の理論　定本　正芳
農業立地の展望　ベルント．アンドレ
流通地域論　長谷川　典夫
日本の産業政策　小宮　隆太郎　他
ジェトロ貿易市場シリーズ　日本貿易振興会
戦後世界貿易の発展と構造変化　青木　健
８０年代の貿易ルール　日本経済新聞社
通商白書　６０年版　通商産業省
ジェトロ白書　６０年版　日本貿易振興会
改正割賦販売法　竹内　昭夫
貿易論を学ぶ（有斐閣選書）　吉信　肇

芸　術（７００）

美学　第３巻　ヘーゲル
体育科学　第１１，１２巻　石河　利寛
日本人のエアロビック・パワー　片山　寛道
運動と健康　保健体育理論研究会　編
原色日本の美術　１～32　小学館
技術シリーズ　デザイン　日野　永一
色彩工学の基礎　池田　光男
芸能入門・考　芸に生きる　小沢　昭一
大系　世界の美術　第１巻～第２０巻　学研
色を心で視る　千々岩　英彰
造形心理学　近江　源太郎
標準音楽辞典　音楽之友社
世界美術辞典　秋山　光和　他
黄色い手帳　三岸　節子
スポーツ行動の予測と診断　徳永　幹雄　他
大極拳好　全日本大極拳協会
運動処方　池上　晴夫
からだ・運動の科学　永田　晟
運動の生理学　小野　三嗣
健康体力論　阿久津　邦男
工芸材料学小論　大西　甚平
図説・運動の仕組みと応用　中野　昭一
現代体育・スポーツ大系　１～３０　別巻　浅見　俊雄　他
講座　美学　１～５　今道　友信
ルオーと白樺派　清春白樺美術館
西洋印刷文化史　S. H. スタインバーグ
ヨーロッパ・キリスト教美術案内　P．ミルロード　他

リッツォーリ版　世界美術全集　1～24
集英社
日本の美術　218～234

語　学（800）

「ことば」シリーズ　1～21　文化庁　編
心理言語学　増補版　ジェイムズ・ティーズ
辞典活用ハンドブック　彌吉　光長
英語学大系　5，8，10，10－2，11
安井　稔　他
独和大辞典　国松　孝二
現代用語の基礎知識　'85　自由国民社
英語略語辞典　広永　周三郎
Deutsches Wörterbuch　1～33
Jacob und
Wilhelm Grimm
メタファーの記号論　菅野　盾樹
日本語の世界　井上　ひさし
日本の語学　第8巻　服部　四郎　他
反対語大辞典　中村　一男
類語辞典　広田　栄太郎　他
故事　名言　由来　ことわざ総解説
三浦　一郎
敬語　思いやりのコミニケーション（有斐閣新書）
坂詰　力治

文　学（900）

鷗外闘う家長　山崎　正和
文学の中の被差別部落像　梅沢　利彦
英米文学史講座　第13巻　福原　麟太郎　他
日本近代文学大事典　机上版　日本近代文学館
メランコリーの水脈　三浦　雅士
ヴィリエ・ド・リラダン全集　1～5
ヴィリエ・ド・リラダン
私ひとりの部屋　ヴァージニア・ウルフ
竹内　浩三全集　小林　察
小説論＝批評論　蓮実　重彦
火　マルグリット・ユルスナール
書物との対話　粟津　則雄
フランス文学夜話　窪田　般彌
大江健三郎論　蓮実　重彦
フランス幻想文学傑作選　3　窪田　般彌
ある青春　パトリック・モディアノ
いのちきしています　松下　竜一
世界文学の名作と主人公　平岡　昇　他
志摩の海にかけた夢　笠原　房
筑摩世界文学大系　81　ボルヘス，ナボコフ
篠田　一士　他

ベスト・セラーズ

11月15日調べ

（東販週報11月8日号）

名古屋　谷口正文館
1位　おいしく食べて治す糖尿病
本郷　彰一・池田　好子
2位　あやしい探険不思議島へ行く
推名　誠
3位　ぜ～んぶおニャンコ
夕やけニャンニャン　編
4位　デート・ア・ラ・カルト名古屋版
小埜寺　弘尚
5位　頭の体操（第7集）　多湖　輝

東京　前田書林
1位　般若心行の神秘力　福永　法源
2位　人類みな兄弟　笹川　良一
3位　洋子へ　長門裕之の愛の落書帳
長門　裕之
4位　迷走する中国　長谷川　慶太郎
5位　回転木馬のデッドヒート　村上　春樹

大阪　紀伊国屋梅田店
1位　ミュータレントの復讐（ハヤカワ文庫）
W．フォルツ
2位　ぜ～んぶおニャン子
夕やけニャンニャン　編
3位　たとえば風が（角川文庫）
赤川　次郎
4位　いきいきバージンオイル美容秘裕
大槻　彰・嶋村　順子
5位　おいしく食べて治す糖尿病
本郷　彰一・池田　好子